

『寶劍記』と『水滸傳』

——林冲物語の成立について——

小松 謙

明代に『水滸傳』として集大成されることになる梁山泊物語は、北宋末における歴史的事実を受けて、南宋・金以降、演劇・語り物などの芸能の場で発展していったものと思われる。元から明初にかけて、多くの梁山泊物語を題材とした雜劇が制作されたこと、その内容が『水滸傳』とはほとんど関わらないものであることについては、すでに別稿で論じた通りである。¹⁾

では、明代においてはどうかだったのであろうか。『水滸傳』の成立・展開と並行する形で生まれた明代の戯曲、特に南曲はどうなのか。四折・一人独唱という厳しい制約を課されていた雜劇とは異なり、数十の齣を²⁾連ね、すべての登場人物が唱うことが許容される南曲においては、雜劇とは異なった状況が認められるであろう。しかも、成立時期が『水滸傳』と並行している以上、両者の間には一定の影響関係が存在するはずである。本論においては、梁山泊南曲の中でも最古のものと思われる李開先の『寶劍記』について考察を加えることにより、『水滸傳』の中でも特に重要な位置を占める林冲物語の成立過程を解明することを試みるとともに、現行の『水滸傳』本文の成立時期についても一つの仮説を提示してみたい。

梁山泊物語を題材とする南曲の中に、明代前期に成立したものは存在しない。現在確認しうる中で最も成立が早いものと思われるのは李開先（一五〇二—一五六八）の『寶劍記』である。この作品の巻頭には、雪簑漁者（李開先の門客だった書家蘇洲）の序が付されており、そこには「嘉靖丁未歲八月念五日」、つまり嘉靖二十六年（一五四七）八月二十五日の日付がある。この序は、李開先の文集である『間居集』巻六にも「改竄雪簑之作」という注記を付して収録されており、蘇洲の作と見られる。この序には李開先自身の手が入っているらしいことからすれば、この日付は成立の時期を忠実に反映しているものと見てよからう。事実、同じく『間居集』巻六に収められている「市井艶詞又序」には「登壇及寶劍記脱稿於丁未夏（『登壇記』と『寶劍記』は丁未の年の夏に脱稿した）」とあり、八月二十五日の日付を持つ『寶劍記』の序は、脱稿後間もなく書かれたものと思われる。ただし、末尾に置かれた王九思の「書寶劍記後」に「嘉靖己酉秋九月九日」、つまり嘉靖二十八年の日付があることから考えて、刊行自体は成立から少し遅

れたようである。

『水滸傳』がいつ今の形になったかは、もとより不明である。その成立時期についても、元末から明代中期に至るまで多様な説があるが、一旦成立を見た後にも改変が加えられ続けたに違いない。容與堂本以下の『水滸傳』に明代中期以降でなければ現れ得ないであろう記述が認められることは、筆者が以前に論じた通りである。³⁾しかし、嘉靖年間の刊ではないかと推定されている残本がほとんど容與堂本と同じ本文を持つことから考えて、遅くとも嘉靖年間のある時期には今日知られるものとはほぼ同じ内容を持つ『水滸傳』が存在したと見るべきであろう。実際、有名な郭武定板『水滸傳』を刊行した郭勛は嘉靖二十年（一五四一）に失脚、翌年に獄死しており、また李開先自身が『詞譜』において、唐順之・王慎中といった嘉靖年間の名士たちが『水滸傳』をたたえたといっている点からしても、嘉靖年間には『水滸傳』がまとまった形で存在し、流通していたことは確実であろう。

とすれば、当然ながら『寶劍記』が成立した時には現行とほぼ同じ『水滸傳』が存在したことになる。つまり、先にふれた記事からも彼自身『水滸傳』を目にしていたものと考えられる以上、李開先は『水滸傳』をもとに『寶劍記』を書いたと見るのが常識的な判断というものである。しかし、そこには疑問の余地があるように思われるのである。ことは『水滸傳』の内容に関わる。

二

『寶劍記』は『水滸傳』⁴⁾第七十一回で語られる林冲の物語を題材とする。『水滸傳』では自害して果てることになっている林冲の妻が、『寶劍記』では小間使を身代わりに立てて生き延び、最後に林冲と団円することや、林冲が指揮する梁山泊の軍勢の脅威にさらされた朝廷がその主張を認め、高俅父子を差し出して復讐させた上に官位を与えるといった、ハッピーエンドという南曲の約束事に基づく違いこそあるものの、大まかには両者のストーリーは一致する。従って、『寶劍記』は『水滸傳』を演劇化したもののように見える。

しかし、林冲物語は『水滸傳』の中ではかなり特殊な性格を持っているのである。そもそも物語の基調自体、ブラックユーモアに満ちた諧謔的雰囲気の基本とする『水滸傳』の中にあつては異例の悲劇的なものである。それだけに特に知識人からは好まれ、林冲が雪をついて酒を買いに行く場面などは画題としても多く用いられ、また京劇などでも多く演じられているが、全体を通して読んだ場合、この部分が他から浮いているように感じられることは否めない。

更に、林冲の性格にも大きな問題がある。⁵⁾そもそも、すでに何度も指摘されている通り、林冲の綽号「豹子頭」は、『三國志演義』などにおいて張飛の容貌を形容する語であり、事実『水滸傳』第七回における初登場の描写

那官人生的豹頭環眼、燕頰虎鬚、八尺長短身材。

その旦那は豹のような頭に丸い目、燕のあごに虎ヒゲ、八尺ほ

どの体。

は、嘉靖本『三國志演義』巻一「祭天地桃園結義」における張飛の描写

身長八尺、豹頭環眼、燕頰虎鬚。

とほとんど合致する。そして、後に梁山泊五虎将の一人となつてからは、「丈八蛇矛」を得物にするが、これも張飛の武器である。つまり林冲は張飛をモデルとしたキャラクターなのであり、そのことは第四十八回において

満山都喚小張飛、豹子頭林冲便是。

梁山泊中の人が「小張飛」と呼ぶ、これぞ豹子頭林冲。

と明示されている通りである。第七十一回の石碣に見える百八人の名簿でも、第五位に置かれた關羽もどきの關勝とペアで第六位に置かれていることは、やはり林冲が小張飛といふべき人物であることを示している。

とすれば、關勝が關羽の重厚さを模倣したキャラクターに造形されているのと同様、林冲も張飛に似た単純粗暴なキャラクターであるべきであろう。ところが、第七十回十回の物語を読む限り、林冲は少しも張飛に似てはいないのである。

たとえば第七回、妻にちよつかいを出した男がいると聞いた林冲は、その男を殴ろうとして、相手が高俅の養子高衙内だと知った途端に手が出せなくなり、

林冲本待要痛打那厮一顿、太尉面上須不好看。

ぶん殴つてやるつもりだったんだが、太尉様の顔をつぶしてし

まう。

と微温的な発言をして魯智深に批判される。これは直情かつ粗暴な張飛とは大違いであろう。ところがその後、親友の陸謙にだまされたと知った林冲は、陸謙の家をたたき壊した上に、短刀を持って陸謙を探し回る。ここで一旦粗暴な側面が見えたようだが、あとは無実の罪で捕らえられ、配流の道中で董超・薛霸から理不尽な迫害を受けながら耐え忍び、あげくの果てに殺されかけたところを魯智深に助けられるが、それでも二人を殺そうとする魯智深を止める。更に柴進のもとで洪教頭との試合を所望されたときには、

這洪教頭必是柴大官人師父、不爭我一棒討翻了、他、須不好看。

この洪教頭は柴様の師匠に違いない。一打ちでやつつけてしまつたらまずいだらう。

と、また分別を働かせる。

つまり、林冲はほぼ一貫してやや小さな律儀者として描かれているのである。そうした林冲の性格が一変するのは、彼の物語が終わりに近づく第十回でのこと、危ういところを助かつて陸謙たち三人を返り討ちにした林冲は、雪の中を逃れるうち、百姓のグループに出会って火に当たらせてもらうが、酒を分けてくれと頼んで断られると暴れ出して百姓たちを追い散らし、

都走了、老爺快活吃酒。

みんな行つちまったな。俺様は楽しく飲ませてもらおう。

とうそぶく。この後林冲は、酔つてよろめきつつ歩いた末に、倒れたところを戻ってきた百姓たちに捕らえられてしまふ。これは、そこま

での林冲には全く似合わない行動というべきであろう。

この林冲が暴れる場面について、高島俊男氏は「このごく短い一節は、林冲の変貌を暗示する重要なエピソードである。……こうして林冲は、順良で折り目正しい軍人から、ならず者へ、そして盗賊の首領へと変化していく」とされる。⁶⁾しかし、『水滸傳』においてそのような近代的文学技法が用いられるものであろうか。

考えてみれば、この粗暴かつ少々間抜けな行動は、張飛にはまことにふさわしいものである。つまり、この場面において林冲は、「豹子頭」という綽号にまことにふさわしい行動を取っているのである。そして、よく気をつけてみると、それ以前の部分にも林冲が張飛のエピソードであることを暗示する部分が存在する。

一つは、すでにふれた陸謙に対する彼の態度である。家をたたき壊すのもさることながら、その後の短剣を持って探し回るといふ行動は、他の部分における林冲の人物像とは合致しない。しかしそれ以上に問題なのは、第十回に見える李小二のセリフである。

李小二は、かつて東京で林冲に救われて、彼を恩人と仰ぐ男である。滄州で飲み屋の亭主になっていた彼は、配流されてきた林冲に会って喜び、何くれとなく世話を焼く。ある日、怪しい二人組（陸謙と富安）がやってきたのを見た李小二は、彼らの口から「高太尉」という言葉が漏れたのを聞いて妻に相談するが、妻から林冲を呼んできてはと提案されてこいう。

你不省得。林教頭是箇性急的人、摸不着便要殺人放火。
おまえはわかっくらんな。林教頭様は気の短いお人だ。何かと

いうと人殺しや火付けをしようとなさる。

これが、ここまで描かれてきた林冲の性格とは全く一致しないことはいうまでもない。しかもこの言葉を発するのは、林冲をおとしめようとする敵ではなく、彼を恩人とあがめ、ひたすら肩入れする人物なのである。つまり、この評価は全く悪意なしに下されたものであることになる。しかし、これが張飛に対する評価であるとすれば、それは全く異とするには足りまい。

つまり第七〜十回においては、林冲は律儀者として描かれつつも、時々彼の粗暴さが顔をのぞかせるのである。これは、彼の性格の両面性の表現といった近代文学的な技法によるものではあるまい。おそらく林冲は本来「豹子頭」、つまり張飛まがいの乱暴者であった。李小二がいう「殺人放火」にすぐに走る人間像は、この張飛まがいの林冲のものである。とすれば、小心で律儀者の林冲は何なのか。

林冲の正体を暗示するのは、演劇の世界における林冲像である。今日京劇・崑曲などに登場する林冲は、ひげのない二枚目か、あるいは梁山泊集団の成立後であればひげをつけた長靠武生、つまり老生による武将の姿を取っている。今日の演劇においては、張飛の姿をした林冲が登場することはありえない。つまり、演劇の世界では林冲は生真面目な二枚目であり、粗暴な張飛もどきではない。これは、『水滸傳』第七〜十回の主要部における林冲像と合致するものといえよう。では、演劇におけるこのイメージの元になるものは何であろうか。

今日崑曲・京劇など各地の地方劇で広く演じられている「夜奔」という劇がある。古くは明の徐復祚の『三家村老委談』ですでに言及さ

れているこの一段が、演劇の世界における林沖のイメージを決定づけたものである可能性は高からう。そして、この「夜奔」は「寶劍記」第三十七齣に基づいているのである。

ここで議論をまとめてみよう。本来の林沖は、「豹子頭」つまり張飛まがいのキャラクターであった。第七〜十回の林沖物語の最後に近いくだりで、林沖は張飛を思わせる行動を取る。そして、それ以降の林沖は、それほど目立った特徴を示すわけではないが、第十一回は「投名状」がわりに旅人の首を取ってこいと王倫にいわれて出かけていき、第十九回の「林沖水寨大併火」では大勢の前で王倫を刺殺する。

これらは張飛に近い行動といつてよからう。後半における林沖は、格別特徴的な行動を取るわけではないが、馬軍を率いる五虎将の一人として、「丈八蛇矛」を得物に戦う。五虎将は、いうまでもなく『三國志』の五虎将をモデルとしており、ここで關勝と林沖が五虎将の筆頭を占めているのは、關羽と張飛にならったものであるに違いない。つまり、第十回後半以降の林沖は、「小張飛」そのものである。

すると、第十回前半までの林沖は何であるのかが問題になってくる。この部分における林沖は、梁山泊物語における本来の林沖とは異なるキャラクターの持ち主である。第十回まででもどこどころで張飛に似通う性格の片鱗を示す点から考えて、おそらく張飛に似た林沖の上に、全く異なった林沖の物語がかぶせられたのであろう。ではそのキャラクターはどこから来たのか。

慎重深い二枚目という、張飛とは全く対照的な林沖は、おそらく演劇の世界から導入されたものであろう。実際、この性格は通常の南曲

の男性主人公にほぼ共通するものといつてよい。妻との愛情と、悲劇的な別離が強調されるのも、南曲の多くと共通する。特に妻との別離の場面が延々と続くのは、南曲の常套的パターンと合致する。ただ、南曲とは違って、結末が団円に終わらないだけのことである。

とすれば、ここに『寶劍記』の影響を見出すのはごく自然な発想であらう。『寶劍記』の内容が『水滸傳』に導入された結果、この部分のみ林沖の性格が異なり、また他の部分とは違う悲劇的な雰囲気が漂っているのではないか。最後に団円に終わるとはいえ、『寶劍記』は中盤まで非常に悲劇的な調子を持ち続けている。

しかし、そこには大きな問題がある。前節で述べたように、『寶劍記』が成立した嘉靖二十六年には、現行のものと同様の本文を持つ『水滸傳』がすでに存在していたものと思われるのである。『寶劍記』が『水滸傳』に影響することはありえないのではないか。

三

『寶劍記』は、本当に嘉靖二十六年の成立なのであろうか。さきに見たように、作者李開先自身がそういい、李開先自身が手を入れた序文にそうある以上、この事実には疑問の余地がないように見える。しかし、序文をよく読むと、そうは言い切れないことが明らかになってくるのである。

蘇洲の名で書かれてはいるものの、実際には李開先自身が手を入れた、つまり作者自序と見なしても大過ないその序文には、『寶劍記』

について、蘇洲の口吻を借りて次のように述べられている。

予遊東國、只聞歌之多者、而章丘尤甚、無亦章人爲之耶。或曰、坦窩始之、蘭谷繼之、山泉翁正之、中麓子成之也。

私が東国（山東）に行つてみると、この戯曲が多く唱われてゐるのを耳にした。特に章丘での流行ぶりが目立つことからすると、章丘の人の作品なのではあるまいか。一説には、坦窩が始め、蘭谷がそれを引き継ぎ、山泉翁がそれを正して、中麓子が完成させたのだという。

「中麓子」は李開先のことである。つまり、この記述によれば、李開先は他の人の仕事を引き継いで完成させたことになる。では他の三人は誰なのであろうか。

三人のうち、「蘭谷」については、この号を名乗る人は多いものの、李開先と関わりを持っていた可能性のある人物はなかなか見つからない。一方、「山泉翁」については、候補者を容易に見出すことができる。王士禛『漁洋詩話』巻上に「山泉翁詩」を引いている。

翁嘉靖間進士、名澄甫。官御史。壽光人。文和公珣之孫。

翁は嘉靖年間の進士で名は澄甫、官は御史、壽光の人で、文和公珣の孫である。

「文和公珣」とは、成化年間に内閣大学士となつた劉珣のことである。壽光県は、李開先が居住していた章丘からはかなり東になるが、山東を代表する大族として北京官界で強い影響力を保持していたためか、李開先はこの劉氏一族と親しかったらしく、『間居集』巻七には、進士合格当時世話になつたという澄甫の叔父劉銑のために書いた「資

善大夫太常寺卿兼翰林院五經博士西橋劉公墓誌銘」が収められており、澄甫の名も文中に見える。なお、王士禛が「嘉靖間進士」というのは誤りで、実際には正徳三年（一五〇八）の進士、つまり嘉靖八年（一二二九）の進士である李開先よりはかなり先輩ということになる。これは、『寶劍記』の前身に関わつた人物としては、世代的にもふさわしいものといえよう。つまり、号・李開先との関係・年代のいずれからいっても、劉澄甫が「山泉翁」であることは動かないものと思われる。

一方、「坦窩」の素性を明らかにすることは容易ではないが、手がかりがないわけでもない。

前七子の筆頭である李夢陽に「陳公六十壽序」という文がある（『空同集』巻五十七）。そこには次のようにいう。

陳公者鄆人也。年六十矣。……公號其居曰坦窩、遂自稱坦窩道人。

子某以名進士、官至山東參議。其壽之辰也、為正徳己卯八月一日。

參議君歸稱觴于家。

陳公は鄆の人である。歳は六十。……公はその家を坦窩と名付けて、坦窩道人と自称した。子の某は進士に合格し、官は山東參議にまでなつてゐる。陳公の誕生祝いの日取りは正徳己卯（十四年（一五一九）八月一日である。參議君は帰郷して実家で祝杯を挙げた。

「坦窩」という号は比較的珍しいものではあるが、これだけでは『寶劍記』との関わりの有無については知るよしもない。「陳公」についても、もう少し詳しいことはわからないであろうか。

名前が書かれていない以上、「陳公」の素性を探る鍵となりうるのは、出身地が「鄆」であることと、息子が進士になって山東参議の地位についたことの二点であろう。「鄆」とは河南の鄆陵のことに違いない。鄆陵は開封府に所属し、開封の南六十キロほどに位置する。つまり、山東に隣接した地域ではある。

では、山東参議で鄆陵出身の陳姓の人物はいるであろうか。幸いなことに、参議ほどの地位になれば、『山東通志』巻二十五之一に歴代在職者の名が列挙されている。そこに次の記述を見出すことができる。

陳溥、河南鄆陵人。

姓・出身地・官職という三つの条件にすべて当てはまる唯一の存在である以上、この人物が陳公の息子であることはまず間違いない。では、陳溥と李開先または劉澄甫との間には何らかの関わりを見出さるであろうか。そこで陳溥の名が見える資料を調べていくと、『山西通志』に行き当たる。同書巻八十八「名宦」にいう。

陳溥、鄆陵人。正徳四年以進士任陽曲縣知縣。性剛貞而勤慎、措施務洽民心、擢監察御史、祀名宦。

陳溥は鄆陵の人。正徳四年、進士として陽曲県知縣に任じられた。剛直廉潔にして慎み深く、政務をとるに当たっては民心を得ることにつとめて、監察御史に拔擢され、陽曲ではすぐれた官吏として祀られた。

そして、劉澄甫の名も『山西通志』巻七十八に見えるのである。

劉澄甫、進士。正徳時任右参議、為僉事、前任巡按宣大御史。山東壽光人。

劉澄甫、進士。正徳年間右参議に任じられ、僉事となった。もと巡按宣大（宣府・大同）御史である。山東壽光の人。これだけでは詳細がわからないが、『山東通志』巻二には次のよう

にいう。

劉澄甫、字子静、壽光人。大學士翊孫。正徳戊辰進士。以監察御史、巡饒兩淮、豪商李宣納貨爲指揮、横行江淮、澄甫擒治之。巡按大同、首劾代藩與鎮巡相結爲害。太監張忠提軍出塞、澄甫監之、兵得勿擾。擢山西参議、駐偏頭關。武宗西巡、澄甫供事惟敏、地方賴之。武宗無嗣、疏請選擇宗室之賢者育宮中。後致仕歸。著有山泉集。

劉澄甫、字は子静、壽光の人である。大學士翊の孫に当たる。正徳戊辰（三年）の進士。監察御史として兩淮地方の塩政を巡察した。豪商李宣は金を上納して指揮の肩書きを手に入れ、江淮一帯で横暴な行爲を働いていたが、澄甫はこの者を逮捕して裁いた。大同の巡按御史となり、代王が総兵・巡撫らと結んで悪事を働いていることを最初に弾劾した。宦官張忠が軍を率いて北方に出撃したとき、劉澄甫は監察を担当し、彼の力で軍は問題を起こさなかった。山西参議に拔擢され、偏頭關に駐屯した。武宗が西を巡幸した際には、澄甫の対応が早かったため、地元は助かったものである。武宗には嗣子がなかったため、宗室からすぐれた人を選んで宮中で養育しよう上疏して求めた。その後致仕して故郷に帰った。著書に『山泉集』がある。

つまり、劉澄甫と陳溥は同じ時期に山西で官職についていたことに

なる。陳溥が正徳四年に「進士を以て」陽曲知県に任じられたという事は、翰林院入りしない進士の初任官が多く知県であることを考えれば、彼は正徳三年（一五〇八）の進士、つまり劉澄甫の同年であるように見える。しかし、「進士題名碑」によれば、陳溥は弘治十八年（一五〇五）、つまり一回前の科挙に合格しており、実際には同年進士ではない。服喪など、何らかの事情で陳溥の任官が遅れたのかもしれない。

一方、劉澄甫は正徳三年に進士になり、そのあと兩淮の監察御史を経て、宣府大同の巡按御史から山西右参議になっている。これだけ見ると、二人は同じ時期に山西で勤務していた可能性がある程度で、両者の間に関係があると断定することは困難に思える。しかし、別の史料がこの二人の間に親密な関係があったことを示しているのである。そして、そこに浮かび上がる彼らの人間像は、『山東通志』『山西通志』のそれとは大きく隔たっている。

四

『明實録』のうち『大明武宗承天達道英肅睿哲昭徳顯功弘文思孝毅皇帝實録（以下『武宗實録』と略称）』巻一百四十五の正徳十二年正月の記事に、

録獲口北姦細馮敬等功。

北方のスパイ馮敬らを捕らえた功績を賞した。

として、このとき賞を与えられた人々の名前を列挙した中に、

巡按御史劉澄甫・錦衣衛千戸王福各銀五兩紵絲一表裏、僉事盛鵬・孔公才、都指揮王本・宋文、郎中李志學・陳溥、主事曹聰・馮洙并都指揮款錦等二十一員各紵絲一表裏。

巡按御史劉澄甫・錦衣衛千戸王福にそれぞれ銀五兩と紵絲（からむしで織った上質の麻布）を服一着分、僉事の盛鵬と孔公才、都指揮の王本と宋文、郎中の李志學と陳溥、主事の曹聰と馮洙、それに都指揮の款錦ら二十一人にそれぞれ紵絲を服一着分与えた。

と見える。つまり、劉澄甫と陳溥は同じ事件に関係していたわけである。そして、この時の「功績」は、実にはわがわがしいものであった。『武宗實録』には続いている。

時張忠既出師不見虜而還、因執馮敬等、以文其功、遂皆受賞。

この時張忠は出撃しながら敵に会わないまま帰ってきたので、馮敬らを捕らえて自分たちの手柄をでっちあげた。それでみな賞を受けたわけである。

前後の事情を述べれば、前年の正徳十一年にモンゴルが白羊口という地点から進入して北京に迫るといふ事件があった。そこで宦官張忠を提督軍務、左都督劉暉を総兵官として出撃させたが、会敵せずに終わったというわけである。功績がないことを恥じた張忠は、スパイの馮敬なる者を捕らえて（詳細は不明）、それを自らの功績として主張し、関係者一同が恩賞を受けた。こうしたいわゆる「冒功」の悪習は、正徳・嘉靖期には枚挙にいとまがないほど蔓延していたが、これはその一例ということになる。

更に、同書卷一百四十六の正徳十二年二月、つまり右の記事の翌月には、

録大同打魚王山及鎮西南山莊坪等處功。

大同打魚王山ならびに鎮西南山莊坪（これらの地名については

詳細不明）などにおける功績を賞した。

として、やはり張忠以下の名前が列挙される中に、

紀功御史劉澄甫・管糧郎中陳溥・參議孫清・僉事劉澤・試知事

田奮陞一級。

紀功御史劉澄甫・管糧郎中陳溥・參議孫清・僉事劉澤・試知事

田奮を一級昇進させた。

と、やはり二人の名が、しかも今度は肩を並べて見える。この件について、同書は次のような説明を加えている。

先是太監張忠既班師、諸將杭雄等乃有此捷、澄甫勸奏、因以調

兵制勝爲忠功。瓊爲覆請、故忠再受賞、而併及瓊。是時瓊與權倖

相結納、四方奏捷率歸功本兵、數承蔭叙云。

以前に宦官の張忠が軍を返した後になって、杭雄ら諸將がこの

勝利をあげた。劉澄甫が功績の内容を確認して上奏することにな

り、その機会を利用して、軍を動かして勝利をもたらしたという

理由で張忠の功績としたのである。王瓊（当時の兵部尚書）が確

認して上申したので、張忠はまた賞を受けることになったのだが、

王瓊にも賞が及んだ。当時王瓊は権勢を握っていた帝のお気に入

り（錢寧・江彬らのこと）と結んでいたもので、各地から届く勝利

の報告はみな兵部尚書の功績としていた。それで何度も恩蔭や叙

任を受けたのである。

更に、この件について『明史』卷一百七十四「安國傳」には次のように見える。

帝遣中官張忠、都督劉暉、侍郎丁鳳統京軍討之。比至、已飽掠去。

忠・暉恥無功。紀功御史劉澄甫攘國等功歸之。大行遷賞、忠等悉

增祿、予世廕。尚書王瓊亦加少保、蔭子錦衣。國時以署都督僉事

爲寧夏總兵官、僅予賞授。

帝は宦官張忠・都督劉暉・兵部侍郎丁鳳に命じて、京軍を率い

てモンゴルを討たせたが、到着した頃には存分に略奪した上で立

ち去っていた。張忠と劉暉が功がないのを恥としたので、紀功御

史の劉澄甫が安國たちの功を奪い取って張忠らのものにしたので

ある。昇進と恩賞の沙汰が大々的に行われ、張忠たちはみな昇級

するとともに、恩蔭として世襲の官職が与えられ、兵部尚書王瓊

も少保の肩書きを加えられ、恩蔭として子に錦衣衛の官職が与え

られた。安國は当時仮の都督僉事という肩書きで寧夏總兵官の地

位にあったが、わずかに仮ではなく正式の都督僉事になっただけ

であった。

正徳十一年の冬、安國と杭雄がモンゴルを打ち破ったとき、劉澄甫

は紀功御史という功績を確認する役職にあったことを利用して、その

手柄を張忠たちのものにしてしまったわけである。つまり、『山東通志』

が述べていることは実態とは異なり、劉澄甫は張忠に媚びて出世した

ことになる。おそらく『山東通志』は、嘉靖年間に入って張忠が失脚

してから、劉澄甫の關係者が事実を粉飾するためにこしらえられた記

述に基づいているのである。そして管糧郎中（食糧を管轄する役職。辺鎮の司令部などに置かれた）の地位にあった陳溥もこの時ともに賞を得ていることから考えて、彼らはともに張忠の司令部にあつてグループを形成していたのであろう。劉澄甫は、張忠に功績を帰するとともに、そのついでに自分と陳溥にも賞を与え、昇進させたのである。

こうして昇進した結果手にした地位が、劉澄甫においては山西参議、陳溥においては山東参議だったらしい。『武宗實録』卷一百六十六、正徳十三年九月にいう。

甘肅兵備副使戴書・山東右参議陳溥俱以不職爲巡撫都御史所劾、令致仕。

甘肅兵備副使戴書と山東右参議陳溥は、ともに職務を果たす能力がないとして巡撫都御史に弾劾されたため、致仕させることとなった。

更に同書一百六十七、正徳十三年十月にいう。

南京給事中易瓚等・御史謝源等劾論廣西副使陳伯獻・山西右参議劉澄甫・山東右参議陳溥・瑞州知府宋以芳・夔州知府章槩・漢中知府賈銓・嚴州知府王雲・岳州知府黃巽宜罷黜。吏部奏覆、溥・巽已致仕、銓已黜爲民、澄甫・槩當坐不謹令冠帶間住。伯獻以方雲誠如所劾、罪不止罷官、請再移動。制可。

南京給事中易瓚等らと御史謝源らは、廣西副使陳伯獻・山西右参議劉澄甫・山東右参議陳溥・瑞州知府宋以芳・夔州知府章槩・漢中知府賈銓・嚴州知府王雲・岳州知府黃巽は免職すべきである」と弾劾した。吏部が調査して上奏するには、「陳溥と黄巽はす

に致仕し、賈銓はすでに官籍を削つて民の身分にされております。劉澄甫と章槩は、不謹慎という罪で、官の身分のまま退職帰郷させるべきです。陳伯獻については、方雲誠が弾劾する通りのことであれば、その罪は免職ではすみませので、更に文書をやって調査させるのがよいでしょう」。陛下は裁可された。

先の論功行賞の翌年九月と十月のことである以上、彼らの参議という役職は「陞一級」の結果手に入れたものであるに違いない。「不職」「不謹」といった理由で二人がともに退職させられていること、特に後の記事で、すでに致仕しているにもかかわらず、陳溥がまた劉澄甫と並べて弾劾されていることは、彼らがいわばコンビとして認識され、言官から敵視されていたことを示すものであろう。宦官に媚びて地位を手に入れたものの、結局彼らはいわゆる清議に罪を得て、一年もたたない間に官職を奪われることになったのである。李夢陽の「陳公六十壽序」に、正徳十四年八月に「参議君歸稱觴于家」、つまり陳溥が河南鄴陵に帰郷して父の六十の誕生日を祝ったとあるのは、彼が十三年に免職されていることと符合する。この点から見て、「坦窩」と号した陳公が陳溥の父であることは間違いあるまい。

そして、劉澄甫と陳溥がいわば一つ穴の貉ともいべき関係にあつたこと、しかも、陳溥が山東参議の地位にあつたということは、この時山東において勢力を持っていた劉氏一族（劉澄甫の祖父劉翊は大学士にまで上つた大物政治家であつた）と更に密接な関係を結んだ可能性が高いことを考えれば、坦窩の書いたものを劉澄甫が引き継ぐという状況もありえたものと思われる。坦窩と山泉翁の間に介在した「蘭

谷」とは、あるいは陳溥その人だったのかもしれない。そして、李開先が劉氏一族と親密であったことは前述の通りである。

五

以上の考証から、『寶劍記』の制作に関与した四人、「坦窩始之、蘭谷繼之、山泉翁正之、中麓子成之」とあげられる面々のうち三人を具体的に特定することができた。「坦窩」は陳溥の父（名は不明）、「山泉翁」は劉澄甫、「中麓子」は李開先だったのである。

そして「坦窩」の年齢は、李夢陽の文から特定可能である。正徳十四年（一五一九）に六十歳だったということは、その生年は一四六〇年、英宗の天順四年ということになる。つまり、坦窩は一五〇六年生まれの李開先より四十六歳年長であった。劉澄甫の生年は不明だが、前に述べたように正徳三年（一五〇八）の進士であり、嘉靖八年（一五二九）の進士である李開先より二十一年早く及第していることになる。そして、李開先がわずか二十四歳で及第していることを考えれば、劉澄甫は李開先より二十歳以上年長である可能性が高からう。つまり、三人の年齢を考えても、坦窩の制作、劉澄甫の潤色、李開先による再改編という順番は実情に合致することになる。そして、重要なのは、最初の作者が坦窩だったとすれば、『寶劍記』の成立年代が大幅に繰り上がるということになるという点である。

さきに述べたように、坦窩と李開先には四十六歳の年齢差がある。更に、現行『寶劍記』が完成した年代が嘉靖二十六年（一五四七）、

つまり李開先四十二歳の時であることを考えれば、原『寶劍記』の成立年代は、坦窩晩年の作であったとしても現行『寶劍記』より三十年程度はさかのぼる正徳年間（一五〇六―一五二一）であり、もし坦窩が若い時期のものであったとすれば、弘治年間（一四八八―一五〇五）頃である可能性もあることになる。

もし弘治から正徳にかけて『寶劍記』の原型が成立していたとすれば、存在したことを確認しうる『水滸傳』のテキストが嘉靖以降のものばかりである点からすれば、『寶劍記』が『水滸傳』に影響を与えた可能性も出てくる。とすれば、ことは『水滸傳』の成立年代にも関わることになる。

しかし、原『寶劍記』の成立が『水滸傳』テキスト出現の記録に先立つとはいえず、それで現行の『水滸傳』（以下単に『水滸傳』という場合は、容與堂本とほぼ同じ本文を持つテキストをさす）成立以前に『寶劍記』が存在したと断定することはできない。当然のことながら、テキストに関する記録が見える嘉靖年間以前に『水滸傳』が成立していた可能性は決して低くないからである。その場合は、従来からいわれている通り、『寶劍記』は『水滸傳』に基づいて作られたことになる。この点を明らかにすることは困難だが、状況証拠からある程度考えていくことは不可能ではない。焦点は、『寶劍記』が『水滸傳』に基づいているか否かという点にしばられる。

六

さきに、ハッピーエンドに終わることを除けば『寶劍記』と『水滸傳』のストーリーは共通すると述べたが、実は大きく異なる点がある。『水滸傳』においては、妻が高衙内に見初められたことがきっかけとなつて、林冲は高俅に陥れられる。陥れる手段として用いられた劍は、高俅の手先が林冲に売りつけたものである。一方『寶劍記』では、林冲は高俅を弾劾したために憎まれて陥れられる。高衙内に当たる高朋が林冲の妻を見初めるのは、林冲が配流された後に起きる出来事である。寶劍は林家伝来の家宝であり、何と林冲の祖父林和靖が朝廷から賜つた品ということになっている。林和靖は宋初の詩人として名高い林逋のことである。林逋は西湖のほとりに住む高士として知られ、鶴を友に生涯独身で終わったという以上、孫がいるはずも、朝廷から劍を賜るはずもないのだが、ここで林冲の先祖と設定されているのは、年代的に合致する林姓の有名人が他にいないからであろう。

このことに示されているように、林冲の身分自体も『寶劍記』と『水滸傳』では大いに異なる。『水滸傳』における林冲は単なる武人であり、格別の来歴のある人物とはされていないが、『寶劍記』の林冲は、林和靖の孫であるのみならず、第二齣における自己紹介によれば、次のような経歴を持つ。

下官姓林名冲、字武師、本貫汴梁人氏。父乃林皋、官拜成都太守、不幸早亡、撇俺子母孤孀。……林冲早承父業、習讀詩書、爭奈時遭坎坷、身值亂離。方臘入寇、黃榜招賢、吾乃仗劍投於軍門、生

擒斬首、次第成功、授我征西統制之職。因見圓情子弟封侯、刑餘奴輩爲王、小人撥弄威權、盜竊名器、因諫言一本、乃被奸臣撥置天子、坐小官毀謗大臣之罪、謫降巡邊總旗。幸蒙張叔夜舉薦、做了禁軍教師提轄軍務。

それがし姓は林、名は冲、字は武師、本籍は汴梁の出身です。父は林皋と申しまして、成都太守でありましたが、不幸にして早くに亡くなって、私ども母子を寄る辺なきままに捨て去つてしまわれました。……この林冲は、父の遺業を受け継いで学問に励みましたが、残念ながら時節は悪しく、戦乱に遭うこととなり、方臘が乱を起こし、朝廷は人材を求められましたので、私は劍を手に軍門に身を投じることとして、生け捕りしたり首を取つたり、次々に手柄を立てましたので、征西統制の職を授けられましたが、蹴鞠が取柄の遊び人が爵位を受け、宦官風情が王となり、小人が権勢をほしいままにして、高い地位を盗み取っているのを目にしたがゆえに、諫言の上表を行いましたところ、何と奸臣どもは天子様に讒言して、大臣を誹謗した罪を犯したとの名目で、巡辺総旗に降格されてしまいました。幸い張叔夜様のご推挙をいただいたので、禁軍教師提轄軍務となりました。

つまり、林冲は成都太守の地位にあつた一流士大夫の息子であり、科擧受験を目指したが、乱世に遭遇したため武官になつたという。これだけでも一介の軍人にすぎない林冲とは全く異なる。しかも林冲は武功により征西統制となつたという。統制は、『水滸傳』ではおなじみの高級武官の肩書きだが、実際には南宋以降に用いられた名称であ

るらしい。ともあれこの官職は、旅団長以上の将官クラスのものである。もともと明代にはこの名称は用いられていないが、「征西」とつく以上、『寶劍記』の作者たちはこれを明代の総兵レベルに当たる地位と認識していたものと思われる。つまり、林冲は一時將軍にまで上っていた。

その彼が巡辺総旗に降格されたという。総旗は、統制とは逆に、宋代にはなく明代に用いられていた官職名だが、五十人の隊長、即ち小隊長に当たる。つまり、林冲は中将か少将から少尉レベルへと極端な降格処分を受けたことになる。その原因は「諫言」の上表文を出したことにあった。更にこの後、前述したように、彼は高俅たちを弾劾したために高俅に憎まれ、陥れられることになる。

このように皇帝に対する諫言や権臣の弾劾ゆえに処罰されるという事例は、明代、特に正徳・嘉靖年間には非常に多く見られたものである。つまり、おそらくは同時代の状況を踏まえてなされた設定と考えるべきであろう。実際、たとえば蒲俊卿の南曲『雲臺記』でも後漢の光武帝の兄にあたる劉續が言官として王莽を弾劾するという無理な展開が見られることに示されているように、これは当時の時事を反映した明代中後期における流行の設定であった。ただ、武官の身でそのような上表文を出すということは、文武の境界が曖昧になったといわれる明代中期にあっても異例ではあり、特に高俅弾劾は、羽林軍提轄がどの程度の身分と認識されているにせよ、いわゆる「越職」、つまり自身の職務とは関わりのないことに口出しをした行為として処罰の対象となるものである。ただ、林冲を文官と設定することは、さすがに後に

梁山泊に投することからいって無理があり、不自然さを覆うために彼を士大夫の家の出身としたのである。

更に、もう一つ興味深いのは公孫勝の扱いである。『寶劍記』第二十九齣において、配流の道中駅に泊まった林冲は公孫勝にめぐり会う。『水滸傳』における公孫勝が超能力を身につけた道士であり、生辰綱強奪犯のメンバーであることはいまでもないが、『寶劍記』では「参軍」という肩書きを帯びた官僚である。この場面で林冲を救った公孫勝は、第三十五齣では林冲が陸謙たちを殺したことを聞いて、官職を棄てて隠退する。つまり、『寶劍記』における公孫勝は、『水滸傳』とは全く異なるキャラクターなのである。

このように、『寶劍記』は『水滸傳』と大きく異なる要素を持っている。これは、『水滸傳』の設定を当時の時事に合うように変えた結果なのであるか。この点について考える鍵を提供してくれるのは、『寶劍記』以外の梁山泊物南曲の内容である。

七

『寶劍記』は明代に制作された梁山泊物南曲の中でも最古のものと思われるが、それ以降も梁山泊の物語を題材とした作品がいくつか生み出されている。そのうちテキストが現存するのは次の六種である。

沈璟『義俠記』

陳與郊『靈寶刀』

許自昌『水滸記』

沈自晉『翠屏山』

范希哲『偷甲記』

李素甫『元宵鬧』

これらのうち、『義俠記』『水滸記』は特に名高く、今日も崑曲で、また崑曲に基づく京劇などで演じられることが多い。

この中でも特に興味深いのは『靈寶刀』である。作者の陳與郊は万曆二年（一五七四）の進士、太常少卿にまで上った一流の士大夫だが、万曆期に首輔申時行の意向に沿うべく動いて言官を攻撃したことなどであまり評判の芳しくない人物である。彼は劇作家としての名声が高く、雜劇・南曲双方で複数の作品を残している。

さて、現存する『靈寶刀』万曆四十五年（一六一七）刊本の末尾には次のように記されている。

山東李伯華先生舊稿重加刪潤、凡過曲引尾二百四支、内修者七十四支、撰者一百三十支。

山東の李伯華先生（李開先）の旧稿に改変潤色を加えた。引子・尾と過曲（引子・尾以外の曲）全部で二百四十、そのうち手を入れたものが七十四、自作が百三十である。

つまり、『靈寶刀』は『寶劍記』の改作版であることになる。実際に両者を比べて見ると、確かに同じ句が散見するものの、陳與郊自身が述べているように、全く同じ曲辞を流用しているところは、「林冲夜奔」の一段として名高い『寶劍記』第三十七齣を第二十七齣「窘迫投山」でほぼそのまま使用している例など少数に過ぎず、大部分は書き換えられているといつてよい。興味深いのは、その改作のパターン

である。

『寶劍記』と『靈寶刀』との間で差が一番大きいのは、最初の部分である。『寶劍記』は第一齣副末開場の後、第二齣で林冲一家、第三齣で高俅一家を紹介した後、第四齣は林冲剣を見て嘆くこと、第五齣は高朋遊蕩のこと、第六齣は林冲上書のこと、第七齣は高俅陰謀のこと、第八齣は林冲魯智深交友のこと、第九齣は白虎堂に罨を張ること、第十齣は林冲凶夢のこと、第十一齣は白虎堂にて罨にはまることという展開である。一方『靈寶刀』は、開場は「開宗」として齣に数えず、第一齣は「閒居宴友」として林冲一家及び魯智深・陸謙の紹介、第二齣は「蕩子春遊」として高朋遊蕩のこと、第三齣は「燒香啓爨」として高朋が林冲の妻を見初めること、第四齣は「權奸定計」として高俅陰謀のこと、第五齣は「差賺寶刀」として林冲宝刀を買うこと、第六齣は「節堂拷陷」として白虎堂にて罨にはまることとなる。つまり、「燒香啓爨」の位置が示すように、『靈寶刀』は『寶劍記』の内容を『水滸傳』と合致するように改めているのである。林冲が陥られる原因、宝劍の由来など、先に述べた『寶劍記』が『水滸傳』と異なる点はすべて改められ、林冲の身分も、「禁軍提轄」という『水滸傳』における林冲より高いであろう地位は『寶劍記』から引き継いでいるものの、士大夫の出身でもと征西統制でもない単なる軍人に過ぎない。

つまり、陳與郊の改作は内容を『水滸傳』に合致させる方向でなされていることになる。実はこれは『靈寶刀』に限ったものではない。先にあげた六種の戯曲は、たとえば『義俠記』において武松の婚約者が登場し、また『元宵鬧』において、かつて閻婆惜と密通していた張

文遠が北京大名府に登場して盧俊義の妻賈氏と密通するなど、いずれもある程度独自色を出そうと試みてはいるものの、基本的に『水滸傳』の内容から大きくかけ離れることはないのである。これは、これらの作品が『水滸傳』の刊行後、その演劇化として制作されたことを意味しよう。

『水滸傳』のような強い影響力を持った作品の場合、やはりその範圍から抜け出して独自の展開を示すことは困難なのであろう。この傾向は知識人の手になる南曲に限ったものではなく、京劇などより大衆的な劇種の演目を見ても、盧俊義と史文恭を同門の旧友と設定する「英雄義」のような例外もあるものの、基本的には『水滸傳』の内容から大きく外れることがない。三国物の演劇についても同様のことがいえる。やはり『三国志演義』の影響力が非常に強いためか、三国物は楊家将物や隋唐物のような自由な展開を示さないのである。

逆にいうと、『寶劍記』は極めて例外的であることになる。陳興郊が改作しようとした理由の一端はそこにあつたと見るべきであろう。では、なぜ『寶劍記』だけがこのような独自の姿勢をとりえたのか。『寶劍記』が『水滸傳』の完成に先行すると考えれば、このことは容易に説明することができる。

『水滸傳』第七〜十回における律儀な愛妻家という林冲の人間像は、本来のモデルであるはずの張飛からは全くかけ離れたものであるが、知識階級出身の二枚目武人という『寶劍記』の設定にはびつたりと一致する。つまり、『水滸傳』の林冲像は、『寶劍記』の主要部と重なる第七〜十回のみ、『寶劍記』に基づいて作り上げられていると考えれば、

林冲のキャラクターが激変するという『水滸傳』の奇妙な矛盾も説明可能になる。しかも、先にふれたように、『寶劍記』には公孫勝が『水滸傳』とは全く異なった人物として登場する。『寶劍記』に登場する百八人のメンバーとしては、前述の魯智深のほか、梁山泊を象徴する人物として登場する宋江・李逵、それに第三十六齣における徐寧があげられる。このうち前の三人はほとんど『水滸傳』と同じキャラクターであり、徐寧は指揮（大佐程度に相当する明代武官）の身分で林冲を追跡する役割を担うが、『水滸傳』における徐寧より地位は高いものの、役割や性格は類似しているといつてよいであろう。では、なぜ公孫勝だけが『水滸傳』とは全く異なるのか。

ここで注目されるのが、『大宋宣和遺事』『水滸傳』における三十六人の好漢に名を連ねていながら、周密『癸辛雜識』続集巻上に見える龔聖與の「宋江三十六贊」に名が見えない人物が二人だけいることである。それが、ほかならぬ林冲と公孫勝であつた。そして、この二人は『大宋宣和遺事』においても、名前は見えるものの、林冲は『水滸傳』では消滅することになる花石綱物語の登場人物、公孫勝は全く正体不明の人物であつた。つまり、この二人はおそらく三十六人の中でも独自の物語を持たず、龔聖與が伝える系統の物語においてはこぼれ落ちてしまったキャラクターだったのでないかと思われのである。こうして、名前はあれども物語を持たない登場人物を用いて新しい物語が作られた。それが原『寶劍記』だったのでないか。ただ、『寶劍記』における公孫勝はさすがに梁山泊とは結びつけにくい立場だったために、『水滸傳』では全く異なる魔法使いの道士となつた（『大宋宣和遺事』

における生辰綱強奪の物語においては、公孫勝は強奪犯のメンバーに入っていない。そして、林冲の悲劇的な物語の部分だけが『水滸傳』に取り入れられたのではないか。実際、林冲物語の部分は語彙やテクニカルチームにおいても特徴的であり、この部分が他とは異質であることは言葉の面からも確認できるのである。

八

状況証拠による推論が多く、決定的なものとはいえないが、このように考えれば『水滸傳』における林冲のキャラクターが前後で矛盾していることを問題なく説明することが可能になる。そして、もし本論で述べてきた仮説が正しいとすれば、ことは『水滸傳』成立史に関わってくる。『水滸傳』の本文が成立した時期は、早くても垣窩が原「寶劍記」を制作した後ということになるからである。さきに述べたように、その時期は早くも弘治年間と考えられる。つまり、『水滸傳』本文の成立は弘治から正徳頃、嘉靖にすぐ先立つ時期ということになる。この推論は、『水滸傳』には明らかに陽明学の影響が認められるという筆者が別稿で指摘した事実⁽⁸⁾とほぼ符合しよう。嘉靖前期にはすでに郭武定本が刊行されていることから考えて、容與堂本に見られる『水滸傳』本文の成立時期は、正徳後期から嘉靖初ということになるのではなかろうか。あるいは、郭武定本の成立が『水滸傳』本文の確立において、従来考えられていた以上の意味を持っていたのかもしれない。

注

- (1) 小松謙「水滸雜劇の世界——『水滸傳』成立以前の梁山泊物語」(『水滸傳』の衝撃 東アジアにおける言語接触と文化受容) (勉誠出版社 二〇一〇) 所収。
- (2) 南曲の場面区分については「齣」「折」「出」など多様な用語が用いられる。本稿においては、一般的に場面を表す言葉としては「齣」を使用する。
- (3) 小松謙「『水滸傳』成立考——内容面からのアプローチ」(『中国文学報』第六十四冊 (二〇〇二年四月)、小松謙「『四大奇書』の研究」(汲古書院二〇一〇) に第三部第一章として収録)。
- (4) 以下『水滸傳』の引用はすべて容與堂本による。
- (5) (3) 所引の論文参照。
- (6) 高島俊男「水滸傳の世界」(大修館書店一九八七、後にちくま文庫二〇〇二)「五 人の殺し方について」。
- (7) 高野陽子・小松謙「『水滸傳』成立考——語彙とテクニカルチームからのアプローチ」(『中国文学報』第六十五冊 (二〇〇二年十月)、小松前掲書に第三部第二章として収録)。
- (8) (3) に同じ。

*本論文は、平成二十一・二十二年度科学研究費補助金(基盤研究C) 課題番号二一五二〇三八一「『四大奇書』の研究」の成果である。

(二〇一〇年九月二十九日受理)
 (こまつ けん 文学部日本・中国文学科教授)